



②火山灰が積もった杉林（高隈村付近） ③④火山灰が積もった民家（百引村上百引） ⑤軽石・火山灰が積もった畑（同）
⑥火山灰で埋まった川に立つ人々（同） ⑦噴火後に起きた洪水で池と化した田地（西串良村細山田）
※①～④は鹿児島県立博物館『桜島大正噴火写真』、⑤～⑦は講話会編『大正三年桜島噴火状況（桜島爆発肝属郡被害始末誌）』から



桜島大噴火の記憶

①牛根村（現在の垂水市牛根）から撮影された桜島大噴火

5月下旬ごろから梅雨や台風が到来し、災害が起こりやすい時期を迎えます。もちろん災害は風雨によるものだけではなく、地震や火山の噴火など様々。身近な記憶として新しいのは、平成28年4月の熊本地震や、同年9月に大隅半島を襲った台風16号ですが、最近では霧島連山・新燃岳の爆発的噴火が連日報道され、警戒を強めています。

火山の噴火による災害も他人事ではありません。今回は、大正3年1月に起きた桜島の大噴火をたどり、防災への思いを新たにします。

桜島の大正大噴火

大正3年1月12日に起きた桜島の大噴火は、溶岩や大量の軽石・火山灰を降らせたほか、地震、津波、地盤沈下、土石流なども複合的に発生しました。桜島を中心に死者・行方不明者58人、負傷者112人、全焼家屋2,148戸、全倒家屋113戸を出した大災害でした。

大隅半島にも大きな被害

大量に噴出した軽石・火山灰は、当時西寄りの風が吹いていたため、大隅半島を広く覆いました。特に肝属郡高隈村（現在の高隈町・下高隈町）、同百引村（現在の輝北町上百引・下百引）、曾於郡市成村（現在の輝北町市成・諏訪原）などでは、軽石・火山灰が厚さ約30cm、最も深いところでは1m以上積もるなど、辺り一面、灰色に埋め尽くされました。

これらの噴出物で農地は長い間作付けできず、農業は壊滅的な被害を受けました。また火山灰が排水を妨げ路面が泥状化したり、噴出物で埋没したりして道路が寸断されるなど、市民生活に大きな影響を与えました。河川の上流では土石流や泥流

による土砂災害が度重なり、中・下流ではその後も継続して洪水等が頻発。家屋や農地に多大な被害を与え、復旧は困難を極めました。

2万人以上が移住

溶岩や火山灰などで生活基盤を失った桜島やその近辺の住民らは、鹿児島県が指定した移住地11か所（熊毛郡、肝属郡、宮崎県、朝鮮半島）に移り住んだほか、自分たちで任意に選んで各地に移住しました。県内全体で3,000世帯2万人以上が移住したとされます。

○指定移住

百引村からは約40戸が、県指定の移住先である南大隅町佐多の大中尾や西之表市国上へ、市成村からは約10戸が、宮崎県小林市大王や西之表市国上へ移住しました。一方、花岡村北野（永目）には、東桜島村から88戸が移住してきました。

○任意移住

県が指定した移住先以外にも、東桜島村からは大隅半島を中心に各地へ移住。また被害の大きかった高隈村、百引村、市成村からも、鹿児島・宮崎両県の各地へと、縁故者等を頼り、移り住んだとされています。



山下 仁之助 さん



山下 重信 さん・綾子 さん 夫妻

移住者によって作られた集落「花里」

大噴火後の5月には、東桜島村から花岡村北野への指定移住が完了し、地名は「花里」と改称されました。この時、移住者のリーダーの一人だったのが山下 仁之助さんでした。

花里町に暮らす山下重信さん（84歳）・綾子さん（77歳）夫妻

は、ともに桜島からの移住者の子孫。

仁之助さんの孫に当たる綾子さんは、次のように話します。「祖父の家は溶岩で押しつぶされて、祖父らは命からがら、着の身着のまま必死で逃げてきたと聞いています。わらじを履いていても、地熱で焼けてぼろぼろになり、裸足でやけどを負いながら避難したそうです」

花里への移住者がまずやらなければならなかったのは開墾でした。しかし、移住先は山。

「ブルドーザーも無い時代。移住者たちは、何も無い所に、2〜3年かけて、まさしく手作業で開墾したそうです。本当に苦しい作業だったと思います」

2つの「花里」と「桜島」

山下家にある古い仏壇。移住者の1人が避難する際に、桜島から背負って運んできたものと



桜島から運ばれ守られてきた仏壇



「桜島移民祖先之霊」の碑

「約100年以上前、祖父たちが移住を余儀なくされましたが、花里は静かでした。もちろん、今があるのは桜島のおかげでもあります」

花里公民館の敷地内にある「桜島移民祖先之霊」の碑。碑は桜島の方角を向いて、今も静かに建っています。